

2023年2月26日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「イエスの怒り」

聖書：マルコによる福音書3：1～6

ロシアによるウクライナ侵攻から1年が経過した（2/24）。戦争終結の気配はどこにもない。プーチン大統領は21日の年次報告演説で「戦争を始めたのは西側」だと主張し、「ロシアはそれを止めようとして軍事力を行使している」と侵攻を正当化した。国内向けの典型的な戦争プロパガンダである。戦争は起こしてはいけない、止めなければならない。命の尊さを覚えなければならない、神の怒りはどれ程のものか。

イエスの「怒り」はどこにあるのか？イエスは会堂に入られると「そこに手の萎えた人がいた」。イエスはその手の萎えた人にどう向き合うのか、見ている人たちがいた。安息日に治療は罪である。しかしイエスは癒しの業を行う。

そもそも、この手の萎えた人はどうしてこの会堂にいたのか。自らの意思で、イエスの癒しを求めて来たのか。実はそうではなさそうである。誰かに連れて来られた。意図的に。では誰に連れて来られたのか？この箇所の文脈からして2節の「人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気を癒されるかどうか注目していた」とある。ここでは明らかにイエスを訴える口実を作るための罠であった。その罠のための道具としてこの手の萎えた人が連れて来られたようである。普段は病気で動けない人を会堂に連れてこようなんて微塵も思わない連中。むしろ律法をちゃんと守らないからその罪の証しとして病気になったんだと言い張るそのような学者らが、イエスを訴える口実を作るための道具としてこの病人を利用した。イエスはそのことに怒りを発し、あえて挑戦的に命を張ってでもこの状況に向き合い、たたかったのではないか。

イエスはこの人を会堂の「真ん中に立ちなさい」と言う。何故か？真ん中は、注目が集まるところ。私たちの意識が常に集まるところ。その「真ん中に」イエスは手の萎えた人を立たせた。人間としての尊厳を軽んぜられたその人を「真ん中に」招いたのである。それは、常に私たちが、そのような小さくされた者への思いを忘れず、大切にしなさいというメッセージではないかと思う。

私たちの教会はどうか？そのような方が隅に追いやられてはいないか？私たちの地域、社会はどうか？この国はどうか？「イエスの怒り」は、小さくされた者を軽んじる状況に、片隅に追いやる社会に怒りを発していく。私たちは、イエスのそのような怒りの姿勢に勇気を頂く思いにならないだろうか。イエスの怒りに希望を見て行きたい。（神谷）